

## 10年の今昔

池田明史

昨秋世界を震撼させた米国同時多発テロとこれへの応答としてのアフガニスタン攻撃によって、人々はあらためて中東が「地球の火薬庫」であることを思い知らされつつある。同時に、朝野を問わぬ狼狽やマスメディアを挙げての狂騒は、われわれを明らかなデジャビュ（既視感）の中に放り込んでもいる。然り、10年前の湾岸危機/戦争に際してわが国の官・民がこぞって示した周章狼狽振りとは、煮え滾って発狂寸前の様相を呈していたマスメディアとを思い返すとき、あまりの変化のなさに暫し呆然として立ち尽くさざるを得ない。いったい、われわれ中東研究者が過去10年間わが国社会に向けて発信してきた知見・メッセージ・シグナルは、どこに霧消してしまったのか。

このような虚無感、おそらくわれわれの先達の多くが繰り返し経験してきたものであろう。実際、総体としての社会が内包する特定の異文化への認識に影響を与えるのは、並大抵のことではない。もとより、過去10年ではなく第一次石油ショック以降の過去30年を考えるならば、わが国社会の中東認識は確実に変化しているとも見ることができよう。この間に発信され費消された言説の総量には莫大なものがあるだろうし、「量が質に転化する」というマルクス主義のテーゼに従っても、それらの発信努力は決して無駄ではなかったはずである。われわれに求められているのは、シーシュポスの神話や賽の河原の石積みにも似た虚無感に堪えて、倦まず弛まず発信し続けるという断固とした決意なのであろう。

他方で、われわれの発信内容をより効率的に社会に到達させるための工夫も必要である。とりわけ現今のように「米国の側か、テロリストの側か」あるいは「ムスリムの側か抑圧者の側か」といった敵=味方の両断論が横行する状況においては、そうした枠組みが果たしている社会心理的な機能それ自体を問題にしてゆく必要があるだろう。「敵か味方か」という二項対決的な解釈モデルは、極めて強力な情報の遮蔽機能を備えていて、発信しても撥ね返され、たとえ遮蔽を突破しても内容が著しく歪曲されることになるからである。

いずれにせよ、創刊16年目を迎えた『現代の中東』が担う発信拠点としての役割はまことに大きく、その存在意義は騒然たる世情の昏迷に相即して高まっている。

(いけだ あきふみ/東洋英和女学院大学国際社会学部教授)